

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04510

研究課題名（和文）学びの主体形成を促すパーソナル・ライティングの具体的指導方法の開発と拡張

研究課題名（英文）Development and Extension of Specific Instructional Methods for Subject Formation of Learning Personal Writing

研究代表者

谷 美奈 (TANI, Mina)

帝塚山大学・全学教育開発センター・准教授

研究者番号：60582129

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代の学生の文章力低下、その原因を学生の側に求めれば、自己と社会に対する認識の起点となる「私」が有効に機能していないのではないかと。それを「学びの主体の未形成」とも換言できる。本研究で着目したパーソナル・ライティングとは、書くこと、その原初的体験を学生に経験させ、書き手としての身構えや自己・他者・社会認識の深化を促そうとするものである。実践の結果、学生が文章表現者として自立し、自己認識を深め、他者や社会へと開かれた存在に変化しうることが確認された。さらに、学生の「学びのモチーフ」と「人生のモチーフ」に連繋する自己形成史を促進する構造を持った「実存的な学び」であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、大学生の文章力低下やコピペの問題、学びの主体の未形成といった問題が深刻化するなかで、パーソナル・ライティングの指導方法が開発・実施されれば、学生の書く行為への内発性が促されるとともに文章力の向上と、学生の「学び」に対する内発的な関心や考える意欲が引出されることが期待できる。しかし、わが国においては、パーソナル・ライティングの教育実践研究はまだまだ希少である。その一方で、米国の大学などの前例にもみられるように、伝統的なアカデミック・ライティングだけでなく、その相互補完としてのパーソナル・ライティングが普及することで、今後の大学教育における新たな基盤教育を構築することが可能になる。

研究成果の概要（英文）：The ability of Japanese students to demonstrate their skills in written expression has been decreasing over time. This study suggests the following hypothesis: If the problem originates from the student's lack of recognition of their origin, then "I" does not function effectively in conjunction with the recognition of "self" and "society". In other words, it implies an incomplete formation in learning of this subject. The aim of "personal writing" is for the students to experience writing, as well as habituating a writer's attitude and self-awareness. This educational practice is encouraging independence of a writer, and is providing opportunities for students to open up their "self" to "others". Furthermore, this study also finds personal writing by linking "learning motifs" with "life motifs," and its learning structure to be a form of "existential learning" that fosters their desire for "self-discovery" so as to find the meaning of existence.

研究分野：教育学、教育方法学、日本語文化学、質的研究、自己形成史研究

キーワード：パーソナル・ライティング 学びの主体形成 自己形成 自己省察 エッセー 自己表現 表現主義
アカデミック・ライティング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

現在、わが国の大学における文章表現教育は、発展期の段階にあるとされている。そこでは、大学における「書く」ということが、学生あるいは人間にとってどのような意味を持つものなのか、といった根源的な問いと向き合い、その具体的な試みを大学教育に位置づける時期にきている。すなわち、テクニカルな能力を磨くだけでなく、言葉で思考し表現することを通して自己を認識するという内的にして知的な行為を含むものが「書く力」とであると認識され始めている。

もしも、文章表現の問題がテクニカルな意味における文章指導に限定されているとするのなら、大学教育における文章表現の「現代的意義」が見失われるおそれがあるのではないか。言葉で思考し表現することで自己を認識する、そのような学びをどのように学生に経験させることができるのか。さらには、そうした文章表現教育が、どのような教育的効果をもたらすのか。

このような問題を検討するために、本研究では、大学教育における伝統的なアカデミック・ライティングの相互補完として捉えられる、新しいタイプの文章表現である「パーソナル・ライティング」の教育実践に着目した。

2. 研究の目的

まず、日本の大学における文章表現教育の動向から課題を抽出した。現在、わが国の大学における文章表現教育は、発展期にあるとされている。当初はレポートの書き方や論文指導がその代表とされてきたが、現状ではほかにも多様な指導が各大学で模索されており、文章表現教育のあり方についての課題は今後も大きいとされている。このような問題を検討するために、アカデミック・ライティングの相互補完と捉えられる、新しいタイプの文章表現であるパーソナル・ライティングの実践を研究の対象とした。

つぎに、米国の大学で「表現主義」として創出された Personal Writing の教育実践研究に着目した。Personal Writing とは、1970 年代にマサチューセッツ大学アマースト校のピーター・エルボウ教授らによって創出された文章表現教育であり、学生、広くは人間にとって「書く」ということはどういう行為でどのような意味のあるものなのか、このような根源的な問題と向き合うことから生まれ、実施されてきたものである。

一方、わが国では、大学における Personal Writing の教育実践は周知されていないが、国内の教育実践研究としては、筆者が提唱する「パーソナル・ライティング」があげられる。その特徴は、自己省察（自己と対象の「掘り下げ」と「とらえ返し」）といった思考方法に主眼を置くこと、および単なる文章作成の技術的向上にとどまらず、他者と表現行為を交換することにある。

以上から、大学教育における「書く」ことの教育について、以下のような五つの問題を立てることができる。

- (1) パーソナル・ライティングとは何か、また Personal Writing との違いはどこにあるのか。
- (2) 現在の大学教育においてアカデミック・ライティングが主流であるなかで、パーソナル・ライティングを実践することの意義はどこにあるのか。
- (3) パーソナル・ライティングの指導はどのようになされるのか。
- (4) パーソナル・ライティングを通じて学生はどのように変容したのか。
- (5) パーソナル・ライティングは学生の発達（=自己形成）にとってどのような意味をもちうるのか。

このような問題から本論文の目的は、現代の大学教育においてパーソナル・ライティングを実践する意義について明らかにしようとするものである。

（なお、本報告では、米国におけるパーソナル・ライティングはアルファベットで Personal Writing、筆者の実践しているパーソナル・ライティングはカタカナで記す。）

3. 研究の方法

アクションリサーチによる実践研究を行う。

報告者がパーソナル・ライティングを開発するうえで前提となった課題について検討し、具体的な指導方法を明らかにしたうえで、授業の成果物である学生の作品の分析とクラス内全体の成績評価等の分析を行う。さらに、パーソナル・ライティングを受講した数年後（卒業後）の学生へのインタビューによる追跡研究を行う。さいごに、開発されたパーソナル・ライティングの教育効果と発展可能性について検討する。

4. 研究成果

本研究は、報告者が創造してきたパーソナル・ライティングの教育実践を事例として、現代の大学における文章表現教育の可能性、とりわけ文章表現をとおした「学生における自己認識の深化」「学びの主体形成」「自己形成の促進」といった理念の重要性について検討したものである。現代の大学における文章表現教育が単なる受身的で技術的なものにとどまらず、学生の学びの意欲や自己形成の実現に寄与する実践になりうることを明らかにすることが、本研究の目的であった。

以上の検討から、先に立てた五つの問いに以下のように答えることができるだろう。

(1) パーソナル・ライティングとは何か、また、パーソナル・ライティングと Personal Writing との違いはどこにあるのか。

パーソナル・ライティングとは、フリーライティングに近似する作文教育を基に、その特徴をより顕在化するため独自の手法を加えた教育実践である。その手法は、自己省察（内面の「掘り下げ」、「とらえ返し」）に主眼を置くこと、および単なる作文ではなく作品をめざすこと（作品化）、文章ジャンルとしての「エッセー」を用いること、などにある。さらに「大きな推敲と小さな推敲」「自作朗読発表会」「作品合評会」「ZINE（文集）制作」などの活動を含む。これはたんに文章作成の技術的向上にとどまらない、文章をとおした表現行為を「他者と交換し合う」ことに目標をおくものである。そうした交換を可能とした表現者相互の関係作りによって、学生には、粘り強い推敲の習慣が身につく、書き手として〈自己〉が〈他者〉や〈社会〉に開かれた存在へと変容し、「学びの主体」へと形成される実践である。

また、パーソナル・ライティングと Personal Writing との違いは、ライティングの実践方法と目標設定にある。Personal Writing は、学生自身の発想を大切に、それらを自由に記述することを実践の中心にすえている。これに対し、パーソナル・ライティングは、学生の発想を大切に自由記述させつつも、学生の「独自のものの観方」あるいは「(代替不可能な) 固有な自己を発見する」といった「省察的な思考」に、重きをおくことが特徴的である。さらに、学生は、この思考の要請（＝「掘り下げ」「とらえ返し」）によって、粘り強い「推敲」を実現するようになり、最終的には「作品化」を前提とした〈他者〉に対する「表現行為」を目指すことへとつながっていくことが可能となる。

つまり、パーソナル・ライティングは、自己省察的な文書表現であるが、「表現主義」のようにロマン主義的で個人主義的な理念に始終するものではなく、また社会的認識論のように、はじめから「震災について、いまの社会や日本について考えよ」と問いかけるような、社会（対象世界）ありきのスタンスでもない。学生たちが自分の切実な実感に信を置き、しかも「なぜ、自分はそのように感じるのか」と自問自答するとき、その深度に比例して、他者へ、社会へと射程を拡張する力が生まれることを信じる教育実践である。

(2) 現在の大学教育においてアカデミック・ライティングが主流であるなかで、パーソナル・ライティングを実践することの意義はどこにあるのか。

日本の大学教育においてパーソナル・ライティングを開発し実施しようと考えた理由は二つ挙げられる。ひとつ目は、〈私〉と専門学術的なテーマとの著しい乖離である。「書く＝考える」ことが、学生にとって外在的・形式的に強制された、こなされるべき「義務」でしかなく、内発的な学びと表現への模索や試行に結びつきにくい状況があった。これに対して、ハウツー的な技術の伝授でも、専門知識の注入でもなく、「書く＝考える」ことが学生の内発的な学びの動機やきっかけになることを目指すことが必要であると考えた。

ふたつ目は、現代の学生の特徴として指摘されがちな「学生の文章力低下」、学生の損なわれた「言語的思考」、「学びの主体の未形成」といった問題が挙げられる。このような問題を抱えた学生は、考える主体としての「自己」と「社会」に対する起点となるべき〈私〉がうまく機能しておらず、「書く」ことそのものが、内発的な学びや動機のきっかけにはなっていない、と言い換えることができる。その解決策として、「書く」という経験を通して〈私〉を考え、〈私〉を見つめる新たな学び、換言すれば「〈私〉をとらえ返すための知」を理念とする実践が求められていると考えた。

以上のような問題に対し、なぜ、パーソナル・ライティングの教育的な意義が認められるのかといえば、結局のところ、「書く」「表現する」ということの根拠とは、学生ひいては人間一人一人の性格や感受性、嗜好や関心が異なるという「不同性」にこそ、あるからだといえる。社会認識や歴史認識を形成するために不可欠な論理的思考や批判的知性を育むことをめざすなら、まず〈私〉を書くことから始めることが踏まれるべき道筋である。その道筋にこそ、パーソナル・ライティングの実践の意義が認められる。

(3) パーソナル・ライティングの指導はどのようになされるのか。

パーソナル・ライティングの授業は半期に4つのクールが設定される。1クールにつき一つの課題テーマを出し、クール内に一本の作品を完成させる。前期のテーマは、おもに自分の記憶や体験のなかから場所・人物・感情にまつわる素材を探し出して書き、自己認識を深めて「〈私〉の発見」に至ろうという意図が込められている。後期のテーマは〈私〉を起点にしつつも、やや遠隔対象の位置にある言葉・魅力・感覚を素材にして、それらと〈私〉との関係を書こうとするテーマを設定している。

また、パーソナル・ライティングの授業実践は「対話的」な方式を援用しつつ、実習や個人面談、添削を実施していることが特色となっている。教員の大切な役割は、評価者ではなく学生作品の最初の読み手（読者）となることである。一人ひとりの「言いたいこと」がどんなことで、どのような書き方でそれが綴られているかを確認し、書き手の気持ちに寄り添いながらその文章表現に回答する点にある。さらに、教員自身もサンプル的なワークシートや作品を作成し、「自分がどんな人間なのか」ということを開示して提供する。エッセーは〈私〉自身を素材とするため、ときにはプライバシーに踏み込むこともある。この点には慎重な配慮が必要であるが、対話的な相互関係のなかで学生・教員間と学生・学生間の信頼関係を教室内に構築することがなにより大切である。

さらには、「大きな推敲と小さな推敲」「自作朗読発表会」「作品合評会」「ZINE（文集）制作」などの活動が行われる。これはたんに文章作成の技術的向上にとどまらない、文章をとおした表現行為を「他者と交換し合う」指導を目指している。

(4) パーソナル・ライティングを通じて学生はどのように変容するのか。

学生は誰にでも、なにげなく抱いている自己イメージがある。報告者が実践を通じて出会った学生の自我像には判で押したようなネガティブなイメージがあった。たとえば、「人見知りである」「友達の輪からいつも外れている」「傷つくのが怖い」といったものである。その一方では「友達がいないてはならない」といった根強い強迫観念や、個人的には「いじめを受けていた」り、高校時代に「正規のルート」から落ちこぼれてしまったという挫折感がある。これらのすべてではないにしても、当初どれかに該当する内容を書く学生が圧倒的に多い。しかし、そのような学生たちも、「書く」ことを通して、自らに抱く自己イメージや他者観といったものを更新し変容していった。

さらに、学生の自己評価アンケート（授業を通じて意識し上達したこと）からは、自己認識の深化と推敲の習慣化がトップに挙げられていた。学生は「書く」という経験を通して〈私〉を考え、〈私〉を見つめる「自己のとらえ返し」を少なからず経験できたといえる。

そして、これらの自己評価が示唆的なのは、結局、文章表現を通して学生がどのような自己認識や対象認識を育んだかという「主体の立ち上げ」に問題が集約されていることである。それは表現者としての自意識や書き手としての身構えであり、そのあり方自体が「学びの主体形成」と見なしてもよいであろう。それらのものが自己の内部に生まれ自覚されることができて初めて、他律的で外在的な文章表現教育を脱することができると思われるからである。

(5) パーソナル・ライティングは学生の発達（＝自己形成）にとってどのような意味をもちうるのか。

パーソナル・ライティングは、学生の発達（＝自己形成）にとって、二つの意味があるということができる。ひとつ目の意味は、パーソナル・ライティングは「学びのモチーフに連繋する自己形成を促進する学び」であったということである。それは、学生自身の生きてきた経験や関心、疑問、違和感などといったものから「自分が何者であるのか」「何を知らうと欲しているのか」といった問いを生みだし、それを徹底的に掘り下げ・とらえ返し（＝自己省察）することで、学びに対する「自分のモチーフ」（主題と動機）を持ち、またそれについて自覚していくことを示していた。同時に、これらのプロセスが「自己形成」そのものであって、それゆえに、「自分のモチーフ」と大学の学びとが（けっして表面的でない深さで）深く結びついていった。

ふたつ目の意味は、パーソナル・ライティングは「人生のモチーフに連繋する自己形成を促進する学び」であったということである。それは、学生自身の生きてきた経験や関心、疑問、違和感などといったものから「他者とどう関わるのか」「何に価値や信頼をおくのか」といったことを掘り下げ・とらえ返し（＝自己省察）することで、人生に対する「自分のモチーフ」（主題と動機）を見出し、またそれについて自覚していくことを示していた。同時に、これらのプロセスが「自己形成」そのものであって、それによって、自分を肯定的に捉えたり、人生に意味を見出すことができるようになったりすることを確認できた。

以上の結果から、学生にとってパーソナル・ライティングの意味は「学びのモチーフ」と「人生のモチーフ」に連繋する自己形成を促進する学びであることと、それは「自分探し」の欲求に自らの存在意義とその可能性を見出しうる「実存的な学び」である、ということが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷美奈	4. 巻 11
2. 論文標題 表現教育の可能性「STEM+ARTが求められる時代に」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成城大学共通教育論集第11号	6. 最初と最後の頁 161 - 175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平本毅・谷美奈・川島理恵	4. 巻 10
2. 論文標題 立場を異にする者同士のかかわりの実践と研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム10号	6. 最初と最後の頁 92 - 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷美奈	4. 巻 39
2. 論文標題 自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生(当事者)への聞き取り調査から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 125-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平本毅・谷美奈・川島理恵	4. 巻 9
2. 論文標題 基幹論文 立場を異にする者同士のかかわりの質的記述	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本質的心理学会 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平本毅・川島理恵・谷美奈	4. 巻 9
2. 論文標題 立場を異にする者同士の交流はいかにして生じ、それによって何をもたらせるのか？	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本質的心理学会 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 64-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷美奈	4. 巻 39
2. 論文標題 自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生(当事者)への聞き取り調査から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mina TANI	4. 巻 9
2. 論文標題 Formation du sujet d'apprentissage par la pratique de l'essai personnel : l'expression écrite comme réflexion sur soi	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Presence; Revue transdisciplinaire d'étude des pratiques psychosociales	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 6件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 大学教育における質的研究の多様な展開 パーソナル・ライティングの教育実践を対象とした質的研究の事例
3. 学会等名 2020年度大学教育学会大会ラウンドテーブル19 (オンライン開催)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 「書くこと」「学ぶこと」という視点から大学教育を考える
3. 学会等名 2018年度大同大学 F D 講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平本毅・谷美奈
2. 発表標題 立場を異にする者同士のかかわりの質的研究～地域の居場所と「立場を異にする者」同士の交流～
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 STEM+ARTが求められる時代に 感性を言語をどう結び付けるのか ～パーソナル・ライティングとクリエイティブベーシックの実践から考える～
3. 学会等名 成城大学 F D 講演 表現教育の可能性第 8 回 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 「評価」を考えるワークショップ＝障害者福祉施設の芸術活動と評価を事例に～
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会第19回全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 アートと評価について考えるワークショップ
3. 学会等名 一般財団法人たんぼの家、NPO法人エイブル アート（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生(当事者)への聞き取り調査から
3. 学会等名 第23回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生（当事者）への聞き取り調査をふまえて
3. 学会等名 湊川短期大学第二回キャリア教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 クリエイティブリテラシー&パーソナル・ライティング
3. 学会等名 慶応義塾大学教養研究センターイベントセミナー・居場所「カドベヤで過ごす火曜日」（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 谷美奈
2. 発表標題 自己形成史における物語とパーソナル・ライティング 「パーソナル・ライティング」を経験した大学卒業生への聞き取り調査から
3. 学会等名 大学教育学会第38回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 谷美奈	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 12
3. 書名 表現と教養 スキル重視でない初年次教育の探求	

1. 著者名 山地弘起共編著 谷美奈ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版社	5. 総ページ数 201
3. 書名 かわりを拓くアクティブ・ラーニング 共生への基盤づくりに向けて	

1. 著者名 坂井詩織	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 8
3. 書名 看護と教養 ; パーソナル・ライティング 考える<私>をともに創る 谷美奈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

U Q A R

<https://www.uqar.ca/universite/a-propos-de-l-uqar/departements/departement-de-psychosociologie-et-travail-social/presences-revue-transdisciplinaire-d-etude-des-pratiques-psycho-sociales>

パーソナル・ライティング 考える<私>をともに創る 谷美奈 (取材・文:坂井詩織)
<http://jnapcdc.com/LA/tanimina/index.html>

第13回(2017)大学教育学会奨励賞受賞(対象論文:自己形成史におけるパーソナル・ライティングの意味 パーソナル・ライティングを経験した元学生(当事者)への聞き取り調査から)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----